都市生活環境価値尺度の開発

○佐伯大輔¹・宮崎弦太²・矢田尚也¹・池上知子¹

(¹大阪市立大学大学院文学研究科・²立教大学現代心理学部)

キーワード：都市化、刺激欲求、親和動機

Development of a psychological scale to measure values of living environments in urban areas

Daisuke SAEKI¹, Genta MIYAZAKI², Naoya YADA¹ and Tomoko IKEAGAMI¹

(¹Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, ²College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

Key Words: urbanization, sensation-seeking, affiliation motive

目 的

都市化の程度（都市度）は、居住者に様々な影響を与えるが、都市度の因子構造や、都市度と心理学の変数との関係について検討した研究は少ない。佐伯・宮崎・矢田・池上（2014）は、居住環境の都市度を測定するための「都市生活環境尺度」を開発し、都市的生活環境は、「施設の充実」、「生活の利便性」、「生活の不快感」、「自然の乏しさ」、「交通の利便性」の5つの側面に分けられること、居住環境の「施設の充実」や「生活の利便性」は居住者の自尊心と正の関連があることを明らかにした。ただし、都市的生活環境のどの側面に高い価値を置くかは個人によって異なる可能性がある。

本研究は、都市的生活環境のどの側面を望ましいと判断しているかを測定する「都市生活環境価値尺度」を開発することを目的とする。加えて、都市的生活環境に対する価値判断を規定する要因を明らかにするため、刺激欲求、親和動機、自尊心の個人差との関連性を検討する。刺激欲求や親和動機の強い人は、施設やサービスが多様で刺激が多く、多様な人々が存在するという生活環境の特徴に高い価値を置くことが予想される。また、上記の自尊心との関連を考えると、自尊心の高い人は、施設の充実や生活の利便性といった特徴に高い価値を置くだろう。

方 法

調査参加者：調査会社にモニター登録をしている日本国内に在住の男女 1,050 名（男女各 525 名、平均年齢 48.1 歳）。

尺度・質問項目の構成：(1)フェイスシート：年齢、性別、居住地（農村地帯、山村地帯、市街地等）、(2)都市生活環境価値尺度（9 件法・47 項目）、(3)刺激欲求尺度・抽象表現項目版（5 件法・15 項目；古澤, 1989）、(4)親和動機尺度（5 件法・18 項目；杉浦, 2000）、(5)自尊感情尺度（5 件法・10 項目；Rosenberg, 1965 の尺度を山本・松井・山成, 1982 が邦訳したもの）。その他にも質問項目が含まれていたが、報告は割愛する。都市生活環境価値尺度は、佐伯他(2014)の都市生活環境尺度の 40 項目に、経済的側面に関する 7 項目を加えた尺度の各項目について、「自分が住む周囲の環境としてどの程度望ましいか」を、「1. まったく望ましくない」から「9. 非常に望ましい」までの範囲で回答させた。

手続き：調査会社の Web サイトを通じて調査を実施した。

結 果

都市生活環境価値尺度の構成：佐伯他（2014）の尺度との因子構造の類似性を確認するため、都市生活環境価値尺度の 40 項目に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その結果、固有値の減衰状況から 5 因子構造が妥当と判断した（複数の因子に 40 以上の負荷量を示した 5 項目を除外）。項目内容に基づき、「施設の充実と流行へのアクセス」（9 項目、 $\alpha=.86$ ）、「生活の不快感」（13 項目、 $\alpha=.87$ ）、「自然の豊かさ」（3 項目、 $\alpha=.68$ ）、「交通の利便性」（4 項目、 $\alpha=.87$ ）、「娯楽の少なさ」（2 項目 $\alpha=.50$ ）と命名した。「生活の不快感」因子は、得点が高いほど生活の便利さに高い価値を置いてい

ることを示すように得点化し、「生活の便利さ」得点とした。

居住地域の人口密度との関係：回答者の居住地域の人口密度に基づいて「都市群」と「村落群」に分け、各因子の尺度得点の群間比較を行った。「施設の充実」、「生活の便利さ」、「交通の利便性」は「都市群」の方が、「自然の豊かさ」は、「村落群」の方が有意に得点が高かった（ $t>2.57, ps<.05$ ）。

都市生活環境価値尺度とパーソナリティ変数との関係：刺激欲求、親和動機、自尊心の各下位尺度得点を説明変数、都市生活環境価値尺度の各下位尺度得点を目的変数とした重回帰分析を行った（Table 1）。刺激欲求の下位尺度である「新奇な経験志向」と「抑制からの解放」は、「施設の充実と流行へのアクセス」という刺激の多さと関連する生活環境の価値を高めていた。また、自尊心は、利便性の高い生活環境の価値を高めていた。一方、親和動機の下位尺度である「拒否不安」は、多様な人々の存在と関連する「施設の充実と流行へのアクセス」には影響していなかったが、利便性の高い生活環境の価値を高めていた。

Table1. パーソナリティ変数が都市生活環境価値尺度の下位尺度に及ぼす影響

説明変数	目的変数				
	施設の充実と 流行へのア ク セ ス	生活の 便利さ	自然の 豊かさ	交通の 利便性	娯楽の 少なさ
スリルと冒険志向	-.12 **	-.23 ***	-.02	-.14 **	.02
新奇な経験志向	.14 ***	.18 ***	.24 ***	.18 ***	.00
抑制からの解放	.16 ***	-.05	-.15 ***	-.03	-.13 **
親和傾向	.02	-.05	-.07	-.04	.02
拒否不安	.04	.16 ***	.16 ***	.10 *	-.05
自尊心	.06 †	.17 ***	.12 ***	.13 ***	.01
R^2	.05 ***	.08 ***	.06 ***	.04 ***	.02 **

Note. 値は標準偏回帰係数。† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

考 察

本研究の結果から、佐伯他（2014）と類似して、都市的生活環境は 5 つの側面に分けられること、また、生活環境のどの側面に価値を置くかは、現在の居住環境や個人のパーソナリティによって異なることが示された。一部で予測と異なる影響が認められたものの、都市的環境と村落的環境に居住する人はそれぞれの居住環境に合致した特徴に高い価値を置いていたこと、また、刺激欲求や自尊心がそれぞれのパーソナリティの人が好むと考えられる生活環境の価値を高めていたことから、都市的生活環境価値尺度の妥当性を示す 1 つの知見が得られたといえるだろう。

付記 本研究は、科学研究費（基盤研究（C）課題番号：25380846、研究代表者：佐伯大輔）の助成を受けた。